

おしらせ

【活動組織向け情報】

～里うみセンター（専門家）による個別サポートが受けられます～

活動中に技術面や、組織運営面でお困りのことはありませんか？

JF全漁連・全内漁連では、活動中の技術・運営のサポートを行う専門家（通称：里うみセンター）の派遣を行っています。詳しい内容や、依頼方法については、公式WEBページをご覧ください。



■水産多面的機能発揮対策報告会

藻場・干潟の保全等、漁村を元気にする取組を行う
全国の事例を紹介します。

東京
2/20-21

2月20日（木）13:00～17:30（予定）
2月21日（金）9:00～17:30（予定）
東京ビックサイト（東京都江東区有明3-11-1）



公式WEBページ

<http://www.hitoumi.jp/>



水産多面的機能発揮対策情報サイト
ひとつみ.JP

全国の取り組み情報や、サポート情報、講習会・報告会についての最新情報を掲載しております。



サポート情報
活動組織向けのサポート情報を公開します。

ニュース
講習会・報告会などの最新情報を伝えます。

全国の取組情報
全国の活動組織の取組についてご紹介します。

「海のゆりかご通信」
過去の海のゆりかご通信を公開しています。



全国漁業協同組合連合会 漁政部 田中・関根・金田

電話:03-3294-9616・FAX:03-3294-9658

E-mail:k-support@zengyoren.jf-net.ne.jp

全国内水面漁業協同組合連合会 三栖・御手洗・吉川

電話:03-3586-4821・FAX:03-3586-4898

E-mail:n-tamenteki@naisuimen.or.jp

お問い合わせ

漁村の役割と 水産多面的機能発揮対策事業

漁村には、おいしい魚を提供する以外にも、多くの役割があります。たとえば、水域の監視をしたり、海や川・湖の環境をまもったり。他にも、伝統的な文化や食べ物等があつたり、時に学びの場になつたりもします。

そのような漁村の役割をより効果的に発揮しようと活動を行う全国の漁師や市民のみなさんを支援する事業が、本年度から始まりました。

（水産多面的機能発揮対策事業）



海のゆりかご通信

≈ Vol. 038 ≈

今月の活動リポート ～干潟の保全活動～

水産多面的機能発揮対策事業を活用し、干潟で漁業を行う漁師が中心となり、残された恵みを守り、再び豊かな干潟を取り戻すための活動が行われています。

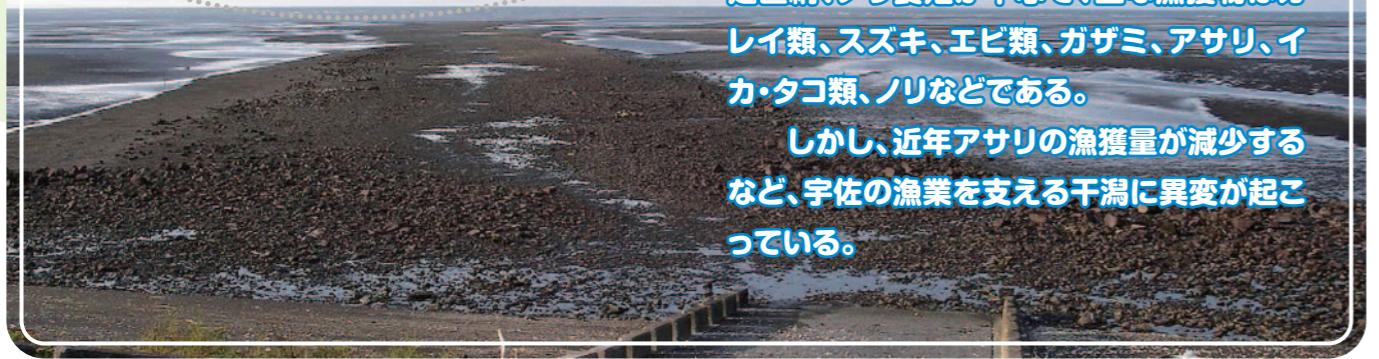
今回の海のゆりかご通信では、干潟保全活動を行う活動グループの一つである、「宇佐干潟保全の会」の取組についてご紹介します。

| | |
|--------|----------|
| 活動組織名 | 宇佐干潟保全の会 |
| 場所 | 大分県宇佐市 |
| 主な活動内容 | 干潟の保全 |



宇佐干潟保全の会

豊前海の再生を願って ～アサリの放流～



宇佐神宮で有名な宇佐市は、大分県東半島のつけ根に位置し、北は豊前海に面している。宇佐市の漁業は、広大な干潟や浅場を生かした小型底びき網、刺網、採貝・採藻、小型定置網、ノリ養殖が中心で、主な漁獲物はカレイ類、スズキ、エビ類、ガザミ、アサリ、イカ・タコ類、ノリなどである。

しかし、近年アサリの漁獲量が減少するなど、宇佐の漁業を支える干潟に異変が起こっている。

宇佐干潟保全の会

アサリ漁獲量の減少に危機感をもった漁師たちは平成21年に「宇佐干潟保全の会」を立ちあげた。平成21年から「環境・生態系保全活動支援事業」、平成25年からは「水産多面的機能発揮対策事業」を活用して柳ヶ浦・長洲・和間の3地区で、干潟の耕うん、ナルトビエイの駆除、アサリの放流などに取り組んでいる。

今回は、宇佐干潟保全の会の副会長である松本昭和さんをリーダーに5名の漁師が活動している柳ヶ浦地区を訪れ、アサリの放流と被覆ネットの設置作業を取材した。

アサリの放流は、干潟の生物生産や海域浄化機能を回復させることを目的として実施している。ナルトビエイなどの食害からアサリを守る被覆ネットの有効性は、年に2回実施している定期モニタリングで確認されている。

アサリの放流

11月7日午前10時。放流用のアサリを満載した運搬車がすでに柳ヶ浦漁港に到着しており、松本さんたちは船外機船に放流用の殻長3cm前後のアサリを積み込んでいた。今年の放流量は合計4トン。昨日までに約2/3は放流

済み。今日放流するアサリ1350kgを船外機船2隻に積み込んで出港。ほどなく放流場所に到着。放流場所は、月に2回実施の日常モニタリングのデータをもとに、大分県や



宇佐市の担当者と相談して決めたそうだ。松本さんの合図で漁師たちが、手際よくアサリを袋ごと海に投入。あつという間に放流は終了。

帰港後、漁協事務所で大分特産のカボスジュースと、今朝獲れたばかりのアミの湯通しをごちそうになりながら話をうかがう。「行政のサポートを受けながら、定期モニタリングで二枚貝の生息状況を調べている



が、干潟を保全する取り組みによってアサリの稚貝の発生が多くなった」と松本さん。

大分県漁協宇佐支店の西さんは、「昔から宇佐の漁師たちは協調性があり、まとまりが良かった。みんなで協力して干潟を守ってきた。漁協の直販所がアサリ飯を販売したこともあり、海に詳しい高齢者や女性がいきいきと仕事をしていた」と語る。



大分県北部振興局の中川さんは、「柳ヶ浦の干潟は、豊前海のアサリの産卵母貝の生息場として重要な石原（いしはら：石混じりの干潟）。アサリの浮遊幼生の供給ネットワークに欠かせない」と説明する。

松本さんは柳ヶ浦地区唯一のノリ生産者だ。ノリの生産・加工・販売の6次産業化を実践している。干潟の保全活動について、「地域の将来のために活動している。組合員の減少、高齢化で現実は厳しい。しかし、干潟を保全することでアサリが増えれば、クルマエビやガザミも同じように増えてくるはず。環境保全と水産業の好循環を期待している」と熱く語る。

被覆ネットの設置

11月7日午後4時。潮が引いてアサリの放流場所は広大な干潟になっていた。岸から放流場所までは1kmくらい離れている。被覆ネット（目合い9mm、大きさ4m×50m、



ポリエチレン製）と固定用の杭（長さ50cm）を軽トラックに積んで放流場所まで移動。現場に到着すると、午前中に袋ごと放流したアサリをザルに移し、放流区画にていねいに撒いて均す。昨日放流したアサリの

元気な潮吹きがいたるところでみられる。「今年のアサリは元気がいいようだ」と松本さんはこり笑う。

アサリを撒いたあとは被覆ネットの展開と固定。漁師たちが作業分担して、てきぱきとこなす。杭でネットを固定



する間隔は通常50cmだが、砂の移動が大きいと予想される場所では、間隔を広げてネット内に砂が溜まらないよう工夫をしているとのこと。松本さんはノリづくりや保全活動をすることが面白いと言う。現場に出るといろいろな問題点がわかり、それらを改善・解決すれば結果を出せるから面白いと言う。被覆ネットを2張り設置したところで日没となった。柳ヶ浦グループ全員で残り1張りのネットを明朝6時から設置することになり、今日の作業を終了した。

豊前海はかつて豊海（とよのうみ）と呼ばれていた。広大な干潟をもち海の幸が豊富なので豊海と名付けられたそうだ。漁師たちの地道な取り組みによって、アサリなどの水産資源が回復し「豊海」が再生することを願いつつ、宇佐を後にした。

～今月のリポーター～

益原 寛文 (ますはら・ひろふみ)

里うみサポーター（国民の生命・財産の保全、地球環境保全、漁村文化の継承）瀬戸内海の島に生まれ、物心つくころから藻場や干潟に親しむ。35年間の環境調査会社勤務を経て、太宰府に技術士事務所を開設。里海の保全などに取り組む。

